私の履歴書

岸 恵子

⑱

新生活

フランスでは何もかもがまぶしかった。夫の父が世界的なピアニスト、母がヴァイオリニストだと知っていたが、学生時から自立している夫の住まいの途方もなく幻想的なのだと知って驚いた。

5階と6階をぶち抜いた高さ7、8㍍はあろうかというアトリエ風の天井。広々としたリビングの4分の1は円を描いた書棚が占めていた。初版物の書籍は革表紙で装丁され、「YVES・CIAMPI」と名前が刻まれていた。

書棚を抱くように伸びるレトロな階段の踊り場は宙に浮いたような食堂になっており、この場所で川端康成先生が白アスパラガスをつまんでパクリと食べたのだった。

時折、集まる詩人や作家、スクリーンで見知った映画スターなど高名な文化人たち。東京の日仏会館で学んだフランス語や東大の前田陽一教授による特別レッスンでたたき込まれた独特のアクセント発声法が大いに役立ち、私はすべてを捨てて選んだ未知の世界に膨大な夢を持った。

シャンピ家にはル・コルドン・ブルー料理学校を首席で出た素晴らしい女性料理人がガヴァナーとしてすべてをつかさどり、彼女に仕える秘書や下働きのお手伝いさんがいた。会食時には彼女の夫が作法に則った給仕人になる。

主婦として私ができることは免許皆伝・師範の腕で来客を瞠目させる派手な花活けをするくらいだった。シャンピ家に集まる錚々たる人たちはニッポンというはるか遠い異国からやって来た私自身や大胆な花活けのことを褒めそやしてくれた。

壮麗な邸宅 文化サロン

「役立たず主婦」奮起 民間大使に

けれど、私は新しい生活に何かを築き上げたかった。何も自分らしさを表現していないのに皆から愛しまれるのがこそばゆかった。何もかもが満ち足りている贅沢は性に合わなかった。私は役立たずの主婦の座を放棄して、遮二無二フランス語を勉強した。

そんな私に大使館から依頼があった。「忘れえぬ慕情」が巻き起こした日本ブームに乗じて、パリ随一の百貨店ギャラリー・ラファイエットが「日本展を催すので四季を象徴する振り袖を展示したい」というのだ。そんなものが大使館にあるわけもない。

日本を去る時、私は禁じられていた金銭は一切持ち出さず、代わりに何十枚という着物を持って来ていた。そこで申し出に応じることにした。

私が提供した4枚の振り袖は見た人々が歓声を上げてくれたが、強い照明に当てられたせいで色があせ、その後、着ることができなくなった。

次なる依頼はオペラ座の「蝶々夫人」の衣装。夫人役のソプラノ歌手は大柄でたいそうな肉付きだった。ソプラノ歌手は恐縮して見事なマロニエの花束を贈ってくれたが、5枚目の振り袖は長期間の公演に使われて無残な姿に変わった。

長嶋、王、野村各氏や有馬稲子さん、萬屋錦之介さんらと（パリの自宅）

私は知らぬ間に「民間大使」として重宝されていた。

野球の知識はなかったが、長嶋茂雄、王貞治、野村克也各氏がパリにいらした時にはシャンピ家に幾度もお招きして、当時流行のツイストを踊った。夫は日本人男性の立派な体格や礼儀正しさに感心したものだった。

（女優）

掲載日 2020年5月19日 日本経済新聞 朝刊 32ページ ©日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。